

# 幼児期前期の子どもの友だちネットワークと社会性との関連

酒井 厚 (山梨大学大学院教育学研究科准教授)

## はじめに

子どもにとっての友だちは、他者との付き合い方を共に学ぶ重要なパートナーであり、社会生活を健やかに過ごす上で欠かせない存在である。心理学では、子どもの友だち関係を、親密さのレベルから仲間や友人、親友と区別したり、友だちとの二者間でのやりとりや複数の子どもによる集団活動に着目するなど様々な観点から捉えてきた。また、こうした個々人の友だち関係の違いが、社会的・情緒的な発達や (Newcomb & Bagwell, 1995)、学業に取り組む態度 (Wentzel & Caldwell, 1997)、非行や孤独感といった社会的適応上の問題 (Parker & Asher, 1993) とどのように関わるかについても研究を積み重ねている。

子どもの友だち関係は、個人差はあるものの、2歳頃から萌芽的な形態として見られるようになる。この時期の友だちとの遊びを通じたやりとりは、他者と協調的にふるまったり、自分の気持ちを相手にうまく伝えるなどの向社会的な行動を促すと考えられている。例えば、2歳頃に多く見られる相手を模倣する遊びは、他者との協調的な関わり方の基礎を形成するとされる (Howes, 1992)。また、幼児期を通じて、子どもは友だちと遊んでいる最中に“いざこざ (けんかやトラブルのこと)”を起こすことが多いが、子どもたちはそのいざこざを解消する過程で、相手に共感したり自分の意見をうまく主張する仕方を学んでいく (丸山, 1999; Chen, Fein, Killen, & Tam, 2001)。さらに、こうした向社会的な行動は、普通の友だちよりも、親しい友だちとのやりとりにおいてよく見られることが知られている。子どもは、2歳の段階でも、いざこざが少なく済む友だちを遊び相手として好む傾向にあり、時間をかけ親しくなっていくと同時に向社会的なやりとりもスムーズになっていく (Ross & Lollis, 1989; Hay, Castle, Davies, Demetriou, & Stimson, 1999)。就園後の幼児を対象に、教室での好きな友だちや遊びたい友だちを挙げてもらった研究では、お互いに好きな子ども同士の方がそうではない子ども同士に比べて、トラブルが生じた際にも感情的にならずに解決しようとし、お互いに手伝い合ったり味方になろうとすることが多いと報告されている (Hartup, Laursen, Stewart, & Eastenson, 1988; 原, 1995)。

このように、幼児期前期の頃から、子どもの友だち

関係は社会性の発達に関わる重要な要因と考えられる。しかし、本邦ではこの時期の友だち関係を扱った研究はまれであり、社会性との関連についてもほとんど検討されていない。近年のわが国では、3歳になった時点で幼稚園に入園する子どもや (文部科学省, 2012)、3歳未満の子どもを保育所に預けようとする家庭が増えてきており (厚生労働省, 2013)、こうした現状からも、幼児期前期における友だち関係について研究することは意義があろう。

そこで本稿では、2-3歳の子どもがいる母親に調査を実施し、当該時期における子どもの友だち関係の実態と社会性の発達との関連について検討した結果を報告したい。とくに今回は、子どもの友だち関係を社会的ネットワークとして捉える視点から検討する。社会的ネットワークとは個人が持つ対人関係のつながりのことであり (安田, 1997)、これまでは主に成人を対象とした社会学の研究として発展してきた。社会的ネットワークは人によって構造が異なり、その構造の違いはいくつかの指標で表される。幼児期前期の子どもに関しては先行研究がないため、今回は児童期以降の子どもの友だちネットワークに関する研究を参考に次の3つの指標を使うことにした (Gifford-Smith & Brownell, 2003)。1つ目は、ネットワークのメンバーとして友だちが何人いるかを示す「規模」である。2つ目は、それぞれのメンバーとの付き合いの長さを示す「持続性」である。3つ目は、メンバーそれぞれとの仲の良さを示す「親密性」である。先述の友だち関係と社会性の発達との関連についての知見を参考にすれば、友だちネットワークの規模が大きく友だち数が多ければ、子どもは多様な友だちと関わり合う機会に恵まれ、相手を模倣するやりとりを通じて、相手への協調的な振る舞いや積極的に関わろうとする態度を身につけていく可能性がある。また、ネットワークの持続性や親密性が高く、付き合いの長い親しい友だちがいることは、いざこざの少ない安定した関係性のもとで向社会的なやりとりが行われ、お互いに社会性を育んでいくことが予想される (Ross & Lollis, 1989)。

以上から、本稿では、幼児期前期における仲間ネットワークに注目し、2歳と3歳での構造の違いを示すとともに、その違いが子どもの友だちとの社会的な関わり方とどのように関わるかについて論じてみたい。

## 方法

### 1. 対象者

2-3歳の子どもがいる母親を対象に、郵送法により調査（\*注）を実施した。子ども平均月齢と月齢幅は、2歳群の136名（男子：65名、女子：71名）では27.1ヶ月（23-35ヶ月）、3歳群の135名（男子：68名、女子：67名）では38.6ヶ月（36-47ヶ月）であった。母親平均年齢は34.2歳（23-44歳）であった。

### 2. 調査内容

#### 2-1. 子どもの友だちネットワーク

子どもの友だちネットワークの構造を規模（友だちの数）、持続性（ネットワーク内のそれぞれの友だちとの付き合いの長さ）、親密性（ネットワーク内のそれぞれの友だちとの親しさ）の3つの指標から評価するため、母親に以下の質問を行った。まず、ネットワークの規模に関しては、子どもと仲の良い友だちが何人いるかを、Table1に示す「1：きまったお友だちはまだいない」～「7：10人以上」までの7つの選択肢を用いて尋ねた。ネットワークの持続性と親密性に関しては、母親に改めて子どもと仲の良い友だちを最大で4人まで挙げてもらい、それぞれとの付き合いの長さ（何年何ヶ月で回答）と親しさのレベル（1：普通～3：とても仲が良い、までの3件法）について回答してもらった。

#### 2-3. 友だち関係における社会性

菅原・向田・酒井・坂元・一色(2006)が作成した社会性尺度を使用した。この尺度は、子どもの友だち関係における「協調性・共感性」と「能動性・自己主張性」の2つの下位尺度から構成され、各項目への回答は「1：全くあてはまらない」～「5：よくあてはまる」までの5件法で行われた。「協調性・共感性」尺度は、子どもが友だちと協調して遊べるかや相手の気持ちを受け入れようとしているかを評価するものであり、「遊びの中で自分の順番を待てる」や「お友だちが困って

いること（気持ち）がわかる”に代表される9項目で構成された。今回は、母親によるこれらの項目への回答を合算したものを協調性・共感性得点とした（得点幅は5～45点）。「能動性・自己主張性」尺度は、子どもが友だちと遊ぶ際の積極的な行動を評価するものであり、“自分からお友だちを遊びに誘う”、“遊び仲間に入るとき、自分から「入れて」という”などの3項目で構成された。今回は、母親によるこれらの項目への回答を合算して能動性・自己主張性得点とした（得点幅は5～15点）。それぞれの尺度の内的整合性を示す $\alpha$ 係数は、協調性・共感性尺度が $\alpha = .88$ 、能動性・自己主張性が $\alpha = .74$ であり、尺度の信頼性は十分な値であった。

### 3. 倫理的配慮

本研究の対象者は、子育て支援センター等の保護者の集まる場所で研究の主旨と守秘義務に関する説明を受け、その場で手渡された調査参加への同意書を封書にて返送した家庭である。同意書には、調査の主旨説明とともに、調査への参加があくまで任意であり途中で辞退することが可能であること等が記載されている。また、本研究を含むプロジェクト全体に対して山梨大学の倫理委員会から承諾を得た。

## 結果と考察

### 1. 幼児期前期の友だちネットワークの実態

母親の回答をもとに、2歳と3歳における友だちネットワークの構造を比較した。Table1は、子どもの年齢別にネットワークの規模に関する結果をまとめたものである。まず、2歳児に関して最も多かった回答は「きまったお友だちはまだいない（30.0%）」と「4～5人（30%）」の2つであった。これらの選択肢に該当した子どもの平均月齢を算出したところ、「きまったお友だちはまだいない」では25.8ヶ月（標準偏差は3.2ヶ月）、「4～5人」では28.7ヶ月（標準偏差は4.0ヶ月）であり、前者の方の月齢が3ヶ月ほど遅かった。また、各選択肢における2歳と3歳それぞれの該当児数を

Table1：友だちネットワークの規模に関する回答分布

	きまったお友だち はまだいない	1人	2～3人	4～5人	6～7人	8～9人	10人以上	合計
2歳	36(30.0%)	2(1.7%)	33(27.5%)	36(30.0%)	4(3.3%)	2(1.7%)	7(5.8%)	120(100.0%)
3歳	16(13.4%)	3(2.5%)	51(42.9%)	30(25.2%)	9(7.6%)	2(1.7%)	8(6.7%)	119(100.0%)

$\chi^2(6)=14.28, p<.05$

$\chi^2$  検定により比較した結果では、2歳では3歳に比べて「きまったお友だちはまだいない」と回答した母親が有意（統計的に意味がある差のこと）に多い。これらの結果を総合すると、2歳におけるネットワークの規模の特徴としては、まだ友だちがいない子どもが3割を占める一方で、月齢が進むに伴い友だちのいる子どもが増えていくことが伺える。3歳児で最も多かった回答は「2～3人（42.9%）」であり、 $\chi^2$  検定による結果でも、3歳では2歳に比べて「2～3人」と回答した母親が有意に多かった。Table1を見ると、3歳児では、「きまったお友だちはまだいない」と回答したのが1割程度であることから、2歳児に比べて友だちのいる子どもが多いことがわかり、2番目に多い回答が「4～5人（25.2%）」であったことを合わせると、総じて2～5人ぐらいのネットワークを持つ子どもが多いと言えよう。

Table2は、ネットワークの持続性に関する結果をまとめたものである。この表は、ネットワーク内に、付き合いの長い友だち（対象児の月齢の半分以上を付き合いしている友だちのこと）がどれぐらいの割合でいるかを単位とし、5つのカテゴリーに分けて集計している。Table2に示すように、2歳（51.7%）と3歳（37.8%）に共通して最も該当児数が多かったのは、「ネットワーク内の全員」であった。各カテゴリーにおける2歳と3歳それぞれの該当児数を $\chi^2$  検定により比較したところ、どのカテゴリーでも統計的な有意差は得られなかった。ネットワークの持続性については、2歳と3歳で共通する特徴が見られ、この時期には、付き合い

の長い友だちに囲まれて過ごす子どもが多いと言えよう。

Table3は、ネットワークの親密性に関する結果をまとめたものである。この表は、ネットワークの中に、親しい友だち（「とても仲が良い」と評価された友だちのこと）がどれぐらいの割合でいるかを単位とし、5つのカテゴリーに分けて集計している。Table3に示すように、2歳（50.8%）と3歳（40.3%）では共通して、「ネットワーク内に1人もいない」に該当する子どもが最も多かった。各カテゴリーにおける2歳と3歳それぞれの該当児数を $\chi^2$  検定により比較したところ、どのカテゴリーにも統計的な有意差は見られなかった。このことから、幼児期前期の段階では、とても親しい友だちの存在がまだ明確でない子どもが多いことが伺える。

## 2. 友だちネットワークの違いによる社会性の比較

それでは、こうした友だちネットワークの個人差は、子どもの社会性とはどのように関わるのであろうか。まず、ネットワークの各構造の個人差を高低で表すため、Table1 - 3に示した分布を参考に、2歳と3歳に共通して全体を二分する際に妥当な選択肢を選び出した。その結果、ネットワークの規模に関しては、「4～5人」以上の人数の選択肢に該当した子どもを高群、「2～3人」以下の人数の選択肢に該当した子どもを低群とした。ネットワークの持続性では、付き合いの長い友だちがネットワーク内の全員である子どもを高群、それ以外の子どもを低群とした。ネットワークの親密

Table2：友だちネットワークの持続性に関する回答分布／ネットワーク内における付き合いの長い友だちの割合

付き合いの長い友だちが…	ネットワーク内に1人もいない	ネットワーク内の半数未満	ネットワーク内の半数	ネットワーク内の半数より多く全員未満	ネットワーク内の全員	合計
2歳	17(14.2%)	7(5.8%)	13(10.8%)	21(17.5%)	62(51.7%)	120(100.0%)
3歳	16(13.4%)	15(12.6%)	20(16.8%)	23(19.3%)	45(37.8%)	119(100.0%)

$\chi^2(4)=7.21, n.s.$

Table3：友だちネットワークの親密性に関する回答分布／ネットワーク内における親しい友だちの割合

親しい友だちが…	ネットワーク内に1人もいない	ネットワーク内の半数未満	ネットワーク内の半数	ネットワーク内の半数より多く全員未満	ネットワーク内の全員	合計
2歳	61(50.8%)	21(17.5%)	20(16.7%)	6(5.0%)	12(10.0%)	120(100.0%)
3歳	48(40.3%)	30(25.2%)	18(15.1%)	12(10.1%)	11(9.2%)	119(100.0%)

$\chi^2(4)=5.28, n.s.$

性では、親しい友だちがネットワーク内に1人でもいる子どもを高群、1人もいない子どもを低群とした。

Figure1とFigure2は、子どもの年齢ごとに、ネットワークの高低による協調性・共感性得点を比較したものである。分散分析を用いて高群と低群の得点間に統計的に有意差があるかどうかを検討したところ、2歳の子どもの場合に、ネットワークの規模の高群が低群に比べて、ネットワークの親密性の高群が低群に比べて得点が高かった。一方、3歳の子どもの場合には、いずれのネットワーク構造においても群間に差は見られなかった。この結果は、2歳では友だちの多さや親しい友だちの存在が協調性や共感性の高さと関連するが、3歳では同様な関連が見られないことを示している。従来の研究から、協調性や共感性の発達には、2歳頃によく見られる友だちを模倣する遊びや注意を共有する行動が関わるとされているが (Howes, 1992)、これらの行動は3歳になると徐々に減少することも報

告されている (Eckerman, Davis, & Didow, 1989; Hay et al., 1999)。そのため、とくに2歳では、友だちが多いことや親しい友だちがいることによって模倣遊びや注意を共有する行動をとる機会が増え、協調性や共感性の発達を早めるものと考えられる。

Figure3とFigure4は、子どもの年齢ごとに、ネットワークの高低による能動性・自己主張性得点を比較したものである。分散分析を用いて高群と低群の得点間に統計的に有意な差があるかどうかを検討したところ、2歳と3歳に共通して、ネットワークの規模の高群が低群に比べて、ネットワークの親密性の高群が低群に比べて得点が高かった。このことは、幼児期前期を通じて、友だちの多さや親しい友だちの存在が能動性や自己主張性の高さと関わることを示している。この時期の友だちとの遊びでは、子どもは相手と交互に行うことが求められ、それがうまくいかないといざこざが生じてしまうことが多い (Hay & Ross,

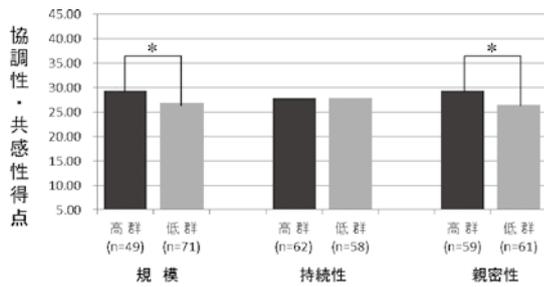


Figure 1 友だちネットワークの違いによる協調性・共感性得点の比較:2歳児  
規模:  $F(1,118)=4.60, p<.05$  持続性:  $F(1,118)=.00, n.s.$  親密性:  $F(1,118)=6.48, p<.05$

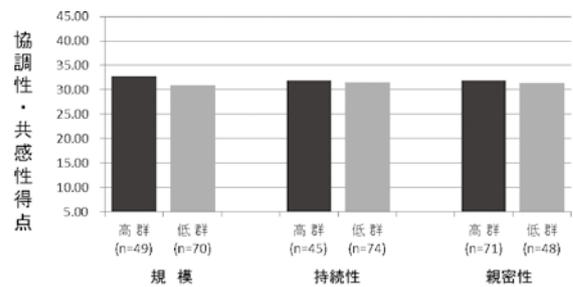


Figure 2 友だちネットワークの違いによる協調性・共感性得点の比較:3歳児  
規模:  $F(1,117)=2.76, n.s.$  持続性:  $F(1,117)=.10, n.s.$  親密性:  $F(1,117)=.30, n.s.$

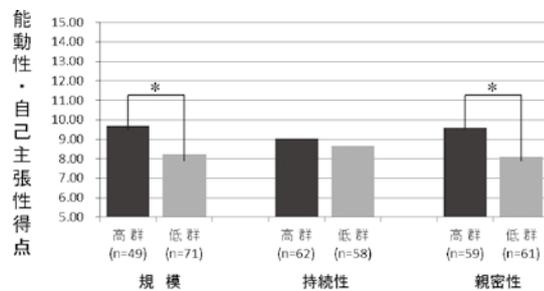


Figure 3 友だちネットワークの違いによる能動性・自己主張性得点の比較:2歳児  
規模:  $F(1,118)=8.77, p<.01$  持続性:  $F(1,118)=.61, n.s.$  親密性:  $F(1,118)=9.59, p<.01$

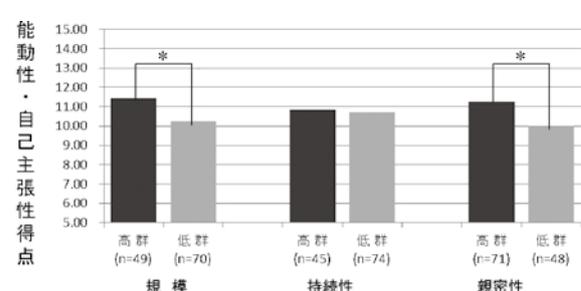


Figure 4 友だちネットワークの違いによる能動性・自己主張性得点の比較:3歳児  
規模:  $F(1,117)=6.03, p<.05$  持続性:  $F(1,117)=.08, n.s.$  親密性:  $F(1,117)=6.59, p<.05$

1982)。幼児期後期を対象にした研究によれば、友だちとのいざこざを経験しそれを解消する過程を通じて、子どもは自分の意見を相手にうまく伝えることができるようになっていくとされる(山本, 1999; Chen et al., 2001)。友だちが多ければ、いざこざを起し解消する経験の機会も増えるであろうから、結果として友だちに能動的な関わり方ができるようになっていくかもしれない。また、これまでの研究から、幼児期前期でも、子どもは親しい友だちと積極的に遊びたがり、その友だちとのやりとりから社会的な行動を洗練させていくと報告されている(Howes & Phillipsen, 1998)。親しい友だちとのトラブルの少ないやりとりは、安心して相手に働きかけることを可能にするため、行動の積極性に結びついていくと考えられよう。

## まとめ

本稿では、2-3歳の子どものいる母親を対象に実施した調査をもとに、幼児期前期の友だち関係の実態と社会性の発達との関連についての結果を報告してきた。とくに今回は、子どもの友だちネットワークに注目し、ネットワークの構造は2歳から個人差が見られ、子どもの友だち数の多さや親しい友だちの有無によって子どもの社会性の発達が異なる可能性が示された。

幼児期前期には、子どもは自ら友だち関係を広げられるわけではなく、主には親が友だちづくりの場を設定することで初めて可能となる。このように、親が子どもの友だち作りのための情報を集めたり、友だちが作れる場所につれていくなどの行動はピアマネージメントと呼ばれる(Tilton-Weaver & Galambos, 2003; 酒井, 2010)。筆者が、2歳の子どものいる288家庭に実施した調査では、月に3~4回以上の頻度で、子どもが友だちをつくれるような場所(公園、児童館など)に連れて行った母親は73.6%、父親が31.2%であった(酒井, 2011)。また、筆者らが行った縦断調査では、3歳時点でピアマネージメントを多く受けた子どもは4歳での友だち関係が良好であり、小学1年生になった際の向社会的な行動も多いという結果が得られている。

少子化が進み子どもの友だち作りが難しくなっている今日、私たち大人は、幼児期の友だち関係がその後の社会性の発達に関わることを認識し、子どもが友だちと出会う機会を積極的に作ってあげることが必要であろう。また、友だちとどうやって遊ぶかを教えることや、ときには子ども同士でトラブルを解決する過程を我慢強く見守ることを心がけ、彼らの社会性の発達を促したいものである。

## (引用文献)

- Chen, D.W., Fein, G.G., Killen, M., & Tam, H.P. (2001). Peer Conflicts of Preschool Children: Issues, Resolution, Incidence, and Age-Related Patterns. *Early Education and Development*, 12(4):523-544.
- Eckerman, C.O., Davis, C.C., Didow, S.M. (1989). Toddlers' emerging ways of achieving social coordinations with a peer. *Child Development*, 60(2):440-453.
- Gifford-Smith, M.E., & Brownell, C.A. (2003). Childhood peer relationships: social acceptance, friendships, and peer networks. *Journal of School Psychology*, 41(4):235-284.
- 原孝成 (1995). 幼児における友だちの行動特性の理解 - 友だちの行動予測と意図 -. *心理学研究*, 65(6):419-427.
- Hartup, W.W., Laursen, B., Stewart, M.L., & Eastenson, A. (1988). Conflict and the friendship relations of young children. *Child Development*, 59(6):1590-1600.
- Hay, D.F., Castle, J., Davies, L., Demetriou, H., & Stimson, C.A. (1999). Prosocial action in very early childhood. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 40(6):905-916.
- Hay, D.F., & Ross, H. (1982). The social nature of early conflict. *Child Development*, 53, 105-113.
- Howes, C. (1992). *The collaborative construction of pretend*. New York: SUNY Press.
- Howes, C & Phillipsen, L. (1998). Continuity in children's relations with peers. *Social Development*, 7(3):340-349.
- 厚生労働省 (2013) 保育所関連状況取りまとめ (平成 25 年 4 月 1 日). <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000022684.html> (2014 年 1 月 16 日引用)
- 丸山愛子 (1999). 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達の研究. *教育心理学研究*, 47(4): 451-461.
- 文部科学省 (2012). 平成 24 年度学校基本調査. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k\\_detail/1329235.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1329235.htm) (2014 年 1 月 16 日引用)
- Newcomb, A.F. & Bagwell, C.L. (1995). Children's friendship relations: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 117(2):306-347.
- Parker, J.G., & Asher, S.R. (1993). Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, 29(4): 611-621.
- Ross, H.S., & Lollis, S.P. (1989). A social relations analysis of toddler peer relationships. *Child Development*, 60(5):1082-1091.
- 酒井厚 (2010). 母親による乳幼児のピア・マネージメントとその関連要因 - 母親の精神的健康とソーシャル・サポートの観点から - *山梨大学教育人間科学部紀要*, 11, 233-239.
- 酒井厚 (2011) 親によるピアマネージメントの提案. *Child Research Net 子ども未来紀行* <http://www.blog.crn.or.jp/report/02/126.html> (2014 年 3 月 16 日引用)
- 菅原ますみ・向田久美子・酒井厚・坂元章・一色伸夫 (2006). 子どもの社会性とメディア接触との関連. “子どもに良い放送”プロジェクトフォローアップ調査中間報告 第4回調査報告書, 60-65.
- Tilton-Weaver, L.C. & Galambos, N.L. (2003). Adolescent's characteristics and parents' beliefs as predictors of parents' peer management behaviors. *Journal of Research on Adolescence*, 13(3):269-300.
- 安田雪 (1997). *ネットワーク分析 - 何が行為を決定するか*. 東京: 新曜社.
- Wentzel, K.R., & Caldwell, K. (1997). Friendships, Peer Acceptance, and Group Membership: Reactions to Academic Achievement in Middle School. *Child Development*, 68(6):1198-1209.

\*注) 本研究は、関東甲信越、関西、北陸、九州各地方における7県において、2009年より1-3歳の子どものいる家庭を対象に実施している縦断研究プロジェクトの一部である。この研究プロジェクトは、文部科学省科学研究費(基盤B22330188)に基づき実施されている。